

前回に引き続き、動物名を冠した古墳の紹介をします。今回の古墳は「大鳥塚古墳」です。大鳥は、主に「ウノトリ」のことを言いますが、ツル、ハクチョウの大型の鳥のことでもあり、大鳥塚古墳が、日本武尊の白鳥陵のことではないかという説もあります。なお、堺市の式内社で和泉国一宮である大鳥大社も日本武尊を祀っています。

また、オオトリは想像上の霊鳥で、雄を鳳、雌を凰といい、両方で鳳凰とよびます。

国指定史跡古市古墳群の大鳥塚古墳は、応神天皇陵(誉田御廟山)古墳の北側にある墳丘長110mの前方後円墳です。後円部径72・6m、高さ12・3m、前方部幅50m、高さ6・1mを測り、幅の狭い濠で後円部が3段築成で高く、前方部は2段築成で低いという特徴を持ちます。

なお、応神天皇陵古墳は東側の墳丘長110mの二ツ塚古墳を避けて

築造しており、応神天皇陵古墳に葬られている大王と二ツ塚古墳に葬られている首長が深い関係を持つているといわれています。同じように北側に隣接する大鳥塚古墳も避けて造られていると考えられ、大鳥塚古墳に葬られている首長と応神天皇陵古墳に葬られている大王とは深い関わりがあるとおもわれます。

現在、大鳥塚古

墳の後円部頂部には、中央に1つ、その周りに4つの計5か所のくぼみが見られます。明治時代には中央のくぼみだけが開いていたようで、そこからは木棺を覆う粘土や鉄製武器、農工具が確認できたと伝えられています。



▲大鳥塚古墳墳丘復元図

また、周囲の4つのくぼみは、第二次世界大戦時の高射砲の台座基礎として掘られたといわれています。

内部は、周辺に板石が散布していないことや明治時代の見聞より、木棺を粘土で覆った粘土槨であると思われる。発掘調査を実施しておらず副葬品は不明な点が多いですが、鉄製の刀剣や鉄鏃、農工具や三面の銅鏡などが伝わっています。

昭和59(1984)年に外周水路改修に伴い古墳の範囲確認のため9か所の調査区を設定し、発掘調査を実施しました。ここでは葺石や基底石のほか、一部円筒埴輪列や、くびれ部には造り出しも確認しました。

古市古墳群の動物を冠する古墳2 大鳥塚古墳

円筒埴輪は、ほとんどが野焼きですが窯で焼いたものも少量認められます。形象埴輪は、家、衣蓋、靴、盾、囲い、甲冑、船形などが出土しています。これらの特徴から、応神天皇陵古墳より古い4世紀末に造営されたと考えられます。

大鳥塚古墳の名前の由来については、定かではありませんが、大きな鳥からくるのか日本武尊からくるのか、かねてからこのように呼ばれていたようです。現在は住宅に囲まれ、周辺的环境も変わりましたが、古くから大鳥塚古墳の端正な姿は、見る人に様々な思いをめぐらせていたと思われま